

平成16年度年次晩餐会 「100周年」動き出す



挨拶する平山会長

■会長挨拶

冒頭、平山善吉会長は、皇太子殿下から「日本山岳会の年次晩餐会に出席できず大変残念だ。出席のみなさまによりしくお伝えくだ

つた。

平成16年度の年次晩餐会が12月4日、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館パミール3階「北辰」で開かれた。晩餐会には470人の会員が出席した。海外からは孫慶錫名誉会員が参加した。創立100周年を来年に控え、いくつかの記念事業が始まっていて、会場は「100周年」の話題でにぎわった。動き出した「100周年」を身近に感じさせる晩餐会だった。

■470人が出席

「さい」ということづてのあったことを紹介。ついで次のように挨拶した。

一、100周年記念事業を成功させて次の飛躍台としたい。記念事業は登山と文化活動の両面から展開する。登山は、これまでのようにヒマラヤの大きな山に遠征隊を送ることは企画していないが、東海支部が昨年、厳冬のローツエ南壁に挑戦した。成功しなかったものの頂上直下250メートルまで迫った。関西支部はことし9月、西チベットの未踏峰2座の登頂に成功、学生部はネパール・ムスタンの未踏峰に初登頂した。国内では分水嶺踏査が進んでいる。自然保護では、青森支部が白神山地で、自然保護委が高尾で、東海支部が猿投で、それぞれに森づくりを進



2004年(平成16年)
12月号(No. 715)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成16年度年次晩餐会	1
坂倉登喜子さん講演会「女が山に登る時・花への思いを馳せて」	4
100周年ニュース	6
海外の山	7
今秋、東チベットで何が起ったか	8
報告	10
事業/自然保護/図書/同期会	13
支部だより	13
山梨	
東西南北	14
富士山の高齢者登拝/森谷ピッケルの所在調査/シシャパンマ登頂と商業登山/75歳、中国未踏峰、スキー登山	
Climbing & Medicine	40
図書紹介	18
会務報告	21
新入会員・図書受入報告	22
INFORMATION	23
ルーム日誌	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時
年末年始休業日 12月29~1月5日

めている。

一、文化事業の目玉は「100年史」だ。それに英文ジャーナルの発行、新日本山岳誌の編纂など、ルームを改修したい。みなさんが集える談話室のような場を設けたいと思っている。大切なことは100周年以降をどうしていくかであり、これは来年3月の会報で皆様に提案し総会に諮って、できることから実施していきたい。

一、全国を8つのブロックに分けて、100周年の記念式典・事業を行う。それぞれに日程等が出揃いつつある。その総決算として来年10月15日にはこの会場で盛大に祝賀会を行いたい。

■新名誉・永年会員の紹介

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降になくなられた会員は60人。フォスコ・マライーニ名誉会員、小倉茂暉・元副会長、大谷優・宮崎支部長らのご逝去された。心からご冥福をお祈りしたい。続いて新名誉会員が紹介され、新しく名誉会員になった高木碯男氏に平山会長が会員章を授与した。高木・新名誉会員は「栄誉あることで感激し喜んでゐる。32・33年



恒例の鏡開き

前に今西錦司先生が岐阜大学の学長になられ、岐阜支部をつくれといわれた。走り回ってつくって、今西先生に初代支部長をお願いしたところ、たった3カ月半で本部の会長になられた。これにはまいった。私は、私が古希のときに3代目となった。岐阜支部は頼りなく気になるが、励みの中心だった」などと挨拶した。

新しい永年会員11人が紹介された。継続して50年会員だった会員だ。うち6人が出席し平山会長から永年会員章が手渡された。新永年会員を代表し、戸野昭会員は「100周年を迎える。その半分、50年間の在籍になんらかの縁を感じ

る。入会は昭和29年。食糧や装備が出回ってきたころだ。山岳会はお茶の水にあり、山小屋風の建物だった。『山日記』の編集をお手伝いした。国体は日本山岳会が主管していて、30年は丹沢だった。選手兼監督で参加した。スキー講習会などもやった」などと挨拶した。

新永年会員

関口 敏 (3506)
豊中 貞子 (4173)
戸野 昭 (4191)
金子 誠吾 (4199)
河西 彌一 (4205)
鬼頭万太郎 (4215)
安藤 英弥 (4216)
山本 光二 (4233)
土田 幸雄 (4241)
近藤 孝 (4244)
渡辺 敏夫 (4249)

■平位会員に秩父宮記念山岳賞

第7回秩父宮記念山岳賞は、平位副会員の「アフガニスタン・ワハーン回廊の踏査と研究」と決まった。表彰式が行われた。

続いて、新入会員の紹介。ことは131人が新しく会員に加わった。代表して林善八郎会員は、

力強く「68歳で夢がなくなった。定款第8条により入会が認められた。定款を守り先輩たちに恥じることの無いよう精進してまいりたい。日本山岳会の脈々とつながる人脈のひとときを際立つ足跡・著作にふれ、その心にひかれ入会した」などと挨拶した。

恒例の鏡開きは、平山会長のほか高木新名誉会員、木下是雄名誉会員、田中文男会員、平位副会員の5人でおこなった。酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海王」。いつもながら、感謝したいと思います。大塚博美前会長の音頭で乾杯し、会食にはいった。

会食をはさんで全国25支部会員の紹介があった。支部の活動は活発である。晩餐会の出席者はこのところ、やや減少気味だが、支部からの参加者は増えている。とくに信濃支部、北九州支部からは、それぞれ19人の参加があった。100周年記念式典・事業の開催に向けての進行状況などが紹介された。参加者は紹介されるたびに、相次いで立ち上がり、ハンカチを振った。盛大な拍手がそれに重なった。



飲談する会員たち

■学生部・関西支部の登山報告

晩餐会に先立ち、午後2時30分から白雲の間で、学生部の「ムスタン遠征隊」、また関西支部の「西チベット登山隊」からの報告があった。いずれも100周年記念事業として実施された。

学生部は、8月下旬から9月にかけてネパールのムスタン・ダモダールヒマールにはいり、チブヒマール峰(6650m)の初登頂に成功、サリブン峰(6328m)にも第2登ながら新ルートからの登頂に成功した。和田岳史隊長は「大学の山岳部は部員が少な

く、単独では海外登山は難しくなっている。日本山岳会学生部で仲間を見つけた。夏休みを利用しての登山だった」と報告。

関西支部は西チベットの未踏峰パチムハム峰(6529m)の初登頂、またギャンゾンカン峰(6080m)の岩壁登攀に成功、同時に河口慧海の足跡を踏査した。

千田敦司隊員は「パチムハムは傾斜45度の雪田を登っていった。ナイフリッジを越えると広い山頂に出た」と語り、清水正弘隊員は、「慧海の足跡踏査で、明治という時代のうねりを感じた」などと報告した。

第7回秩父宮山岳賞を受賞した平位剛会員の講演があった。アフガニスタン北東部に盲腸のように突き出たワハーン回廊。1999年から2002年にかけてガイドやコックを雇い馬やヤクの背に揺られて縦断・横断した経験を平位会員は語った。

平位会員のたどったルートを紹介したあと、地域住民の衣食住からはじまり、魚・蝶の採集、入浴できる温泉の探査など、スライドをつかった話は、なかなか尽きなかった。

■分水嶺踏査の中間報告

慶雲の間で、多彩な催しがあった。100周年記念事業の紹介があり、分水嶺踏査事業では宗谷岬から佐多岬までの分水嶺を実線で記した大きな地形図が掲示された。報告によると11月30日現在、延べ283日間に1574人が踏査事業に参加、約5000*におよぶ行程の34・2%を踏査し終えた。

ことし初めての試みとして、フリーマーケットが開かれ、同好会、同好会、支部からの出品があった。山の切手、カメラ、スキー靴、書籍、カレンダーなど。故風見武秀さんの一周忌を記念した写真展も開催され、エヴェレスト、マナスル、アイガー、モンブランなどの「世界の秀峰」が展示された。

翌日の懇親山行は、碓氷峠で行われた。100周年記念の分水嶺踏査事業に参加する試み。縦走区間は碓氷峠から旧碓氷峠。夜来、暴風雨に見舞われたが、日中は汗ばむほどの陽気となった。平山会長のほか北海道から九州まで多くの支部会員が参加、軽井沢駅から分水嶺を歩いて旧軽井沢に下った。

(文・高橋重之、写真・今村千秋)

「支部長会議報告」

●晩餐会に先立って10時半から支部長会議が開催された。平山会長が冒頭、100周年事業の中央分水嶺踏破に対する各支部の協力を感謝するとともに、引き続き募金などへの協力をお願いした。次に新たに就任した福岡支部の中山健新支部長、宮崎支部の井野元繁新支部長から挨拶をいただいた。

●議事では執行部から、今年の名誉会員、永年会員について。第7回秩父宮記念山岳賞について。100周年記念事業の募金と事業推進状況の報告などが行われた。

●ついで各支部長から

・自然保護活動は会にとつて重要なテーマであり、全国大会への各支部の参加を増やすために旅費を半額くらい本部で援助できないか。

・日本山岳会の活動紹介のパンフレットか小冊子を作成しては。

・今年の総会でも意見が出たが、『山岳』2冊分のような『百年史』は必要ない。無駄を省くべきだ。

・海外の山に補助を受けて行った会員には寄付を義務づけるべきだ。

・支部報で寄付を呼びかけているなどの意見、質問が相次ぎ、活発な意見交換が行われた。(今村)

連続講演会「語り継ぐ黎明期の登山……それぞれの山」 第3回 坂倉 登喜子さん

「女が山に登る時・花への思いを馳せて」

お江戸生れの私と山との出会い

明治43年、お江戸日本橋に生れた私と山との出会いは10歳頃、父との狩猟山行から始まった。狩猟の好きな父に同行し、父が撃ち落したキジやヤマドリを、狩猟用の犬3匹と戌年生れの私とがめがけて走る。それを、犬よりも速く拾って父に渡すと「いい子だね」と父が頭をなでてくれた。父に誉めてもらう事が、子供心に嬉しくて、犬たちと野山を駆けまわって遊んだ。

大正13年、疎開先の長浜で近江富士と呼ばれる伊吹山に登ったのが初めての登山である。近江長岡から登り、3合目辺りから子供用の短いスキーで滑ったことを懐かしく思う。父とは関ヶ原周辺や姉川流域のヤブ山を猟場として、朝早くから暗くなるまで歩きまわった。両親から一字ずつを貰って山に登って喜ぶ子と名づけられたが、その名のように育ち生きてこれ、感謝している。

山恋いの想い——エーデルワイス
ヨーロッパ・アルプスの名花であ

るエーデルワイスを初めて知ったのは、辻村伊助の著書からだ。渡

欧した辻村氏がベニーニセック懸崖に「恋人に贈る花」として有名なエーデルワイスを見つけた。彼は、足を押さえてもらい、身を乗り出し、震える指先でその花を摘み取った……という話である。以来、その花をひと見したいと思いつづけていた。

昭和10年の夏、ついに夢見たエーデルワイスと運命的な出会いをする。日本に咲くウスユキソウはエーデルワイスの変種であるが、谷川岳の岩陰にその花は咲いていた。より高きを目指した若き日の谷川岳の夏に、ウスユキソウはまばゆいばかりの輝きを見せ、白い星の瞬きに似た麗しい姿であった。清楚な花が厳しい自然に耐えて咲く、その力強い生命力に私は魅了された。

以来、エーデルワイスを心の花と決め、清く、優しく、強く生きていくと誓った。この出会いが、エーデルワイスを訪ね歩く山旅人へといえない、私の花追い人生が始まった。

女性登山の黎明



女性登山の黎明期を語る
撮影・高取剛充

昭和初期、女性が山に登ること、それはとんでもないという時代だった。そもそも登山信仰があり、女性には入山禁止という歴史があった。その掟が解かれても、神を祀る山では、山が汚れる、穢れるからと、女性は頂上に立つことはもちろん、登ることでもできず、男性が下山するのを待つこともあった。

また、時代背景に女だてらにという差別意識があった。女性はヤマトナデシコであるのが理想とされた時代だったから、山に登る女性は特殊な目で見られることもあった。

服装と装備——工夫を重ねて

今思うと何もなくだった時代で、自分で工夫して服装や装備を整えていた。初めての富士登山は、父の古衣で上着を作り、地下足袋を履き、もんぺ姿で登った。昭和24年に鹿島槍ヶ岳に登った時は、スカートを下で2つに分けてズボン式にしたズボンスカートをはいた。ズボンスカート

は、はき心地がよかったからしばらく愛用した。靴はクレッタージュで、その上にわらじを履き、家に帰るとわらじの付け替えをした。スキーも最初の頃は袴に和服姿で、転ぶと雪がついて大変困ったものだ。運動具店で女性用のズボンや靴が売りに出されたのはずっと後のこと。あの頃を振り返るとき、物のない時代によくもまあ……装備や服装を懐かしく、愛しく思う。

時代に育まれた「山」と「私」

戦前の昭和2年、日本電気に入社し、その山岳部でしごかれた。部のホームグラウンドであった谷川岳でピッケルを使った滑落防止など登山の基礎訓練を受けた。男性9人に女性1人だけで、まだまだ女性の登山は珍しい頃だった。

戦時中にもよく山にでかけたが、山の装備は隠して汽車に乗った。社会に対してあいまいなという気持ちとはうらはらに、山の魅力には勝てなかったのだろう。

戦後の昭和22年、日本山岳会に入会し、本格的な登山指導と精神面の知識を得る。日本山岳会も女性の登山には厳しかった。女性が山に登らなくてもいい時代だったから。

忘れ得ぬ女流登山家たち

昭和24年、女流登山家の先輩とし

て活躍されていた村井米子、今井喜美子、川森左智子、佐藤テル、黒田初子さんと婦人部を創立した。現在、今井喜美子さんは99歳、佐藤テルさんは100歳になられた。他の3人はもうすでに亡くなられている。村井米子さんは、大正12年にズボンとわらじ姿で穂高から槍へ縦走した逸話の持ち主で、女流登山家のパイオニアであったと思う。

婦人部は大学山岳部の指導を受けて、南・北アルプス、冬富士への登頂、国体登山にも参加協力をした。私の山域も広がり、徐々に高い山へと足場を移していった。

「歩幅」に泣いて……

山は圧倒的に男性社会であり、男性と一緒に歩くことが多かった。いつも男性の歩幅に合わせて登っていた。女性の歩幅と男性の歩幅はかなり違ってしたが、無理をして合わせて歩かないと、ついて行けない、遅れてしまう。岩場での女性の歩幅は男性の半分くらいしかない。男性の後について登っていたら、足場が崩れて滑落しかけた。自分の歩幅でないから当然起こりうる事態である。これはちよつと苦しいなあ、ずつとそう考えながら歩いていたら、それがきつかけで、いつまでも安全に歩けるような女性だけの会を作り

たいなあ、考えたのである。

私自身は、日本山岳会や他の会の男性の中で育って、いかに女性が男性の登り方を勉強しなければならぬか、ずいぶん苦労した。その経験から女性の登り方ということを指導したいと思った。より安全に、より楽しく、女性だけで山に登れないものかと考えた。

女性のための山岳会結成

昭和30年、エーデルワイスクラブを創立した。当時、女性だけの山岳会結成は初めてだったこともあり、新聞社や雑誌社がビックリして、女性だけで本当に山に登れるものかと取材に来た。

昭和30年4月13日の朝日新聞夕刊に「山に行く時はまず家庭の人を納得させる、登る山について十分な知識を得ておく、岩登りとか沢登りとか危険なことはいらないで道のある安全なコースを選ぶ、装備を完全にする、男の人と行く場合は出かける前に家庭にその男の人を紹介してから出かける……」など、女性の登山に対する心構えを詳しく掲載した。現代の人には笑われるかもしれないが、女性の登山の心構えを細やかに示すことが必要な時代であったから。

当時、女性が山に登るのはお転婆だと怒られた。だからこそお転婆で

なく、山の花を愛し、小鳥の声を聞き、そこに住んでいる人たちとの交流を楽しむ、そんな目的を持って山に登ってきた。そのエーデルワイスクラブは、今年50周年を迎える。

女性らしい登山へのこだわり

自分の好きな山を持ち、その山に春夏秋冬登り、季節とともに変化する山の姿に触れて欲しい。ひとつの山を春夏秋冬登ることによって、本当の意味で山の素晴らしさを確認するのだと思う。あつちへ行ったりこつちへ行ったりしているうちに、年を取っちゃうから。

私は女性の歩幅にこだわり、女性だけの山の会を作った。女性の歩幅で登るということは、自分の体力を自覚できるということ。自分の体力で登り、絶対に無理をしないというのは安全な山登りに大切なことだから。ゆとりのある登山があつて、初めて山の楽しさを知るのだと思う。女性らしい登山をそこから確立して欲しいと思う。

安全で楽しい登山への提言

最近、中高年女性の遭難が増えていくが何故だろう。低い山からだんだんと高い山へ、安易な山から困難な山へ、そういうステップを踏まないからではないだろうか。子供が大きくなったからと、50歳、60歳にな

ってから山登りを始める。そして、いきなり槍だ、穂高だと行くから細い尾根で落ちてしまう。山にも順序というものがあるから、ゆつくりと順番に登っていけばいい……。憧れだけでいきなり3000級の山に行かないでほしい。

ザックをお尻に背負って歩いている人を山で見かける。ザックの背負い方から違っているのだ。基本から学び、正しい指導を受ける機会がないからだと思う。

自分で学ばなくても、ツアーに参加すれば登れてしまうという現状にも問題があるような気がする。山の登り方、味よい方はそれぞれいいが、安全で楽しい女性らしい登山へのこだわりをもち続けて欲しい。

(奈良 千佐子)

【10月6日、東京体育館(参加者120名)で行われた、資料・映像委員会主催の講演会記録を元に編集】

坂倉登喜子 1910年東京生れ。

49年、日本山岳会婦人部設立の基礎を作る。55年、エーデルワイスクラブを創立し、女性登山の向上と後進の指導にあたる。66年から今日まで、世界の山々を歩きまわる。国内外のエーデルワイスを求める花追いの旅は今も続く。

100周年記念式典について

式典委員会

日本山岳会の創立100周年を記念する行事として、海外登山、中央分水嶺踏査、百年史の刊行などいろいろな計画、実施されているが、中心をなすのは記念式典である。100年の来し方を偲び、来るべき第二世紀への新しい1歩を踏み出す、記念すべき日としなければならない。

式典は、全国の会員に広く参加を求め、国内外の関係者を招待し、長く記憶にとどめ得る内容の濃い総合式典を東京で開催することと、全国の支部を8つのブロックに分けて、各地でそれぞれにユニークな式典を開催することの2つに分けられる。

<総合式典について>

2005年10月15日(土)に、東京の新高輪プリンスホテルの国際館パミールで開催することがすでに決定している。最も大きいホールの「飛天」で式典および晩餐会を実施し、控えの間「さくら」で、資料・映像委員会が用意した、日本山岳会100年の歩みを示す写真の展示を行う。例年12月に実施する通常の晩餐会は、この年は行わない。ブロック別式典のない首都圏の会員にとっては、唯一の式典に参加するチャンスなので、奮って参加していただきたい。

式典委員会で鋭意検討中であるが、今後方向を決めていくべき課題が多い。

- (1) 例年の晩餐会で実施している永年者表彰、新人の紹介などをどのように取り入れるか。
- (2) 当日の会費をどのくらいにするか。
- (3) 国内外の招待者をどのようにするか。
- (4) 式典のポイントを何にするか。

などである。多くの皆さんのご意見をいただいて充実した総合式典を実施するようにしたい。

<ブロック別式典について>

東京で実施される総合式典に併せて、全国を8ブロックに分けて式典を実施する。

できるだけ大勢の会員に創立100周年を祝っていただきたいという趣旨でブロックごとに開催するので、東京の総合式典に参加できない方々にもぜひブロックの式典には参加していただきたい。

まだ詳細が決まっていないブロックもあるが、以下ブロック別に概況をお知らせする。

●**北海道ブロック** 北海道支部が単独で実施する。2005年8月26日(金)に行うことは決定しているが、場所は未定である。

●**東北ブロック** 青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島をひとつのブロックとして福島支部が担当し、

5月28日に「ホテルリステル猪苗代」で式典ならびに尾形好雄氏の講演を実施、翌29日磐梯山方面の登山を行う。

●**中部日本ブロック** 越後、信濃、山梨、静岡の4支部を1つのブロックとして実施する。越後支部の平田支部長が村長をされている新潟県岩船郡関川村で4支部の会員が集って式典を実施することを決定しているが、場所、日時などは未だ決まっていない。

●**東海ブロック** 東海支部が単独で実施する。2005年10月29日(土)ホテルローズコートで式典を実施し、翌30日に山行を行う。

●**京岐北陸ブロック** 京都、岐阜、福井、石川、富山の5支部をひとつのブロックとし、福井支部が担当して、2005年6月11日(土)に福井市のユアーズホテルで式典を行う。立松和平氏を招き講演会も開催する。翌12日(日)に越知山(朝日町)に登る。

●**関西ブロック** 関西支部創立70周年にもあたるので、2005年11月5(土)、6日(日)の2日間単独で式典ならびに記念山行を実施する。場所は未定であるが高野山が候補にあがっている。

●**中国ブロック** 山陰、広島の2支部が合同して実施する。2005年9月17日(土)にホテル八丁堀シャンテで式典を行い、翌18日(日)宮島に登る予定。

●**九州ブロック** 福岡、北九州、東九州、熊本、宮崎の5つの支部が合同して宮崎県えびの高原に集う。宮崎支部創立20周年にもあたるので、宮崎支部が世話役となって2005年7月16(土)、17日(日)にえびの高原荘で実施する。

以上のように全国の25支部が8つのブロックに分かれて盛大に記念式典を実施する。いずれも第1日が式典、2日目に近くの山に登るという計画のようであるので、ブロックに属している会員の方々には是非参加していただきたい。

詳細が決まり次第、順次会報「山」に掲載する。

海外の山

四姑娘山、
中国人が初登頂

江本 嘉伸


四姑娘山主峰・南面
(97.4.中村保撮影)

四姑娘(スー・クーニャン)山。四川省西部、横断山脈の東端に位置する邛崃山系の最高峰。名のとおり、4つの頂きから成るが、天空に突き上げるような標高6250メートルの主峰が断然、際立っている。先月、4人の中国人登山家がこの山に登った、との一報がホームページ『蜀山女神四姑娘山』で、現地に住む日本人によって伝えられた。

「11月17日と18日に米国人2人と中国人4人が登頂しました。中国人が登頂するのはこれが初めてです。可喜可賀(おめでとう)！」

美しいが、峻険なこの山の初登頂は、1981年4月から7月にかけて、2次にわたって登山隊(1次隊7人、2次隊8人)を派遣した日本の同志社大学隊によってなされている。南面から2千メートルのロープを固定して東稜から登頂したのである。

同じ年の秋、ジャック・タックルら4人から成るアメリカ隊が困難な北壁に挑戦、高所キャンプに11日留まり、アタックをかけたが、5300メートルで断念する結果となった。

1992年、広島山の会が南壁を初登攀、94年にアメリカ隊が南壁広島ルートと東稜の間に新ルートを拓いた。注目すべきは、2002年4月、イギリスのミック・ファウラー、ポール・ラムステンによる北壁のアルパイン・スタイルによる初登攀達成である。詳しくは『山岳97年』に中村保氏が「ミック・ファウラーと四姑娘山主峰北壁初登攀」のタイトルで書いている。立ったまま、あるいは座って宙吊りになったままのピバークで6日間の登攀を続け、2人とも8キロも体重が減ったというから登攀の厳しさが想像できるだろう。

1980年に日本山岳会がはじめた時、登山協会の幹部が「素晴らしい山」と筆者に強調したのが、四

姑娘山だった。しかし、実はその時、もその後も中国人自身は、登頂していない。どのルートも高度の氷と岩の技術なしには登れないからだ。

今回の中国人初登頂は、チョモランマ、チョー・オユーなどで登攀技術を磨いた中国の市民クライマーがアメリカのアドベンチャー・ドキュメンタリー制作者でクライマーのティム・ポウルターら2人と協力、スポンサーを得て企画したもののだ。17日、4000メートルの垂直な氷壁を抜けて南東稜に出る日本隊ルートからアメリカの2人と馬一樺の3人が「アルパイン・スタイル」で登頂、翌18日、陳駿池ら中国メンバーの残る3人も無事登頂した。陳は2003年5月にはチョモランマに登頂している市民登山家だ。

登攀の詳しい模様は不明だが、アルパイン・スタイルを試みる中国クライマーたちの誕生は、新しい時代を予見させる。

昨年8月のこのコラム「オリンピックと中国の市民登山」で書いたように、中国では現在「自分の意志と金で困難な山に登る」市民登山家が頭角をあらわしている。長く「外貨獲得のため外国の客を登らせる」ことに専念していた中国の一部がクライミングの面白さに気づいた、とも

言えるだろう。四姑娘山登頂は、そのひとつの結実である。

年の瀬の別な話をひとつ。

12月4日の日本山岳会晩餐会で『日本山岳会学生部ムスタン遠征二〇〇四報告書』が頒布(2000円)されているのに驚いた。和田岳史隊長(千葉大)以下、早稲田、学習院、立教各山岳部の5人の登山について、前号の『山』の冒頭で報告されているのでふれないが、見事チビマール(6650メートル)に初登頂しただけでなく、10月3日に帰国後2か月で138ページの報告書を出したことは、特筆に値する。

大学は違うが、出発前から相当チームワークがよかったのだろう、随所に隊員の正直な感想がちりばめられており、若い山好きの気分が伝わってきて、楽しかった(それにしても学生に限らず会報『山』の登山報告となると、一様に硬い文章になりがちなのはどうしてだろう)。

海外登山は、計画書と実行、そして報告書があつてはじめて完結するもの、とは、さんざん言われてきたことだが、実際多くの登山隊が1年経っても、2年経っても出していないことが多い。登山の計画と実行だけでなく、最後をしっかり締めくくった5人の隊員に拍手を送りたい。

今秋、東チベットで何が起ったか 入域許可を巡って

中村 保

日本山岳会の会報『山』10月号と横断山脈研究会のニューズレターに英国・NZ隊による「チベットのアルプス」登山の幕開け、という情報を載せました。2004年は東チベットにおける本格的登山が始まる年になるかと期待しておりました。私自身、最後のフロンティアである未踏の念青唐古拉山東部踏査の総仕上げをしようと、易貢蔵布を圍繞する山と氷河の探査と山脈を南から北に横断する計画を進め、早い時期から未開放地域への入域許可を申請して、問題ないとの感触を得ていました。そして、チベットのマッターホルン・カジャチョ(6447^{メートル})の初登頂を目指す英国のアルパイン・スタイルの旗手ミック・ファウラーと10月2日にラサで会うことを楽しみにしていました。

ところが、9月末の出版を目前にして、未踏のビルタソ(6691^{メートル})とチュウチェポ(6550^{メートル})に向かおうとしていたNZ隊から「チベット登山協会から登山

許可は出さないと通告された、あなたの計画は大丈夫か」というEメールが入りました。あわてて私の許可についてラサのエージェントに確かめたところ「申し訳ないが『特別な理由』により許可は取れない」と返事がきました。ミック・ファウラーにも許可は出さないと連絡を受けました。「東チベットで何が起ったのか」、「特別な理由」とは何か。

日本のあるツアー会社は「東チベットのある場所に人民解放軍が出動した」というまことしやかなニュースを伝えてきました。ミック・ファウラーからは、金を使ってもいいから私のルートを使って登山許可を取れないかと頼んできました。これらの許可問題を巡って日・欧・米・NZの間でEメールが駆け巡りました。

私はとにかく現地で『特別な理由』を聞き、許可取得の交渉をするために予定通りラサに出かけました。チベット登山協会と関係の深い私のエージェントは易貢蔵布

への許可取得に再度トライしてくれましたがだめでした。代わりに未開放地域の巴松湖の東側の未踏のペナ谷と工布江達の北側に入る許可を林芝地区の公安局からもらってくれました。

さて、突然許可を出さなくなった『特別な理由』とは、このところ欧米の連中が無許可で未開放地域に勝手に入ったり、無許可で登山を始めたことに対する当局の締め付けによるものです。なお人民解放軍云々の話はガセネタでした。これは西チベットのラダックに近いところで解放軍同士の間で諍いが起こり、北京から調停に赴いたことはあったようです。その折に国境付近への立ち入りが数日禁止されたことがあったが、東チベットとは関係ありません。

エージェントが話してくれた『特別な理由』となった無許可のケースを紹介します。

1、今年の春、2人のドイツ人と2人のアメリカ人がツアンポー大峡谷に入り、ドジョン・ラを越えた。ここは当局が最も厳しく制限しているところである。しばらくして土地の住民から公安局に通報

があり、ラサの旅行会社は5千^{ドル}の罰金と5年間の営業停止処分を受けた。

2、スイスのマウンテンガイドが巴松湖東の著名な未踏峰ジェシナラガブ(6316^{メートル})、古くはナムラ・カルポと呼ばれた)を9月に初登頂してしまった。カトマンズの旅行社が手配した。

3、詳細不明なるも、2人の英国人が未踏峰にチャレンジした。

4、ミック・ファウラーのカジャチョの件は不運であった。どこかでボタンの掛け違いが起こってしまった。少し詳しく書こう。

ミックはカトマンズの旅行社経由、クリス・ボニントンのチャネルを使っていると初め言っていました。にもかかわらず、なぜ許可をとれないのか、私のエージェント(以下「D」・漢民族)にラサで確かめたところ、面倒な状況がわかった。

(1) ミックは当初「D」に許可取得を頼んできたが、実際には別のラサのエージェントを使っていた。このエージェントが許可をとるといってミックから金を受け取りながら、登山許可を取っておらず、途中の嘉黎の町までの許可だ



念青唐古拉山東部・ブンカの西北西の未登峰(6091m)

けで山に登らせようと企んだ。が、事態の深刻さを知り、登山許可を取って欲しいと、Dに泣きついてきた。当然、断わりなしにチャネルを変えたミックに面子を潰されたと立腹し、断固協力を断わった。

(2) この段階でミックは私に橋渡しを頼んできたが、どうする術もなかった。ミックは「D」に何度もコンタクトしようとしたが無視された。ミックはUIAAの人脈を通じて中国登山協会と西藏登山協会に顔のある元アメリカ山岳会会長で、80年代初頭に中国とアメリカとのパイプを作った私の友人テッド・ベイルに工作を打診した。が、ベイルの人脈は古すぎて役に立たないので、彼は「D」と

親しいチョモランマ北壁登攀者にとりなしをリレーした。結果はまったく無駄だった。私は「D」が電話で「たとえ英国の女王に頼まれても許可は出さない」とそのアメリカのクライマーに息巻いているところに居合わせた。

かくして、ミック・ファウラーの今年のカジャチヨは画餅に帰しました。来年に巻土重來の意欲をもやし、許可問題について私のアドバイスを求めてきています。

余談ですが、折りしも日本山岳協会から2005年2月の海外登山研究会にミックを招聘したいから都合を訊いて欲しいと頼まれました。問い合わせたところ「本当にうれしい話なので日本に行きたいが、税務官としての私の年間休暇は限られており、家族へのサービスと来年のカジャチヨのために休みは確保しなければなりません。ご賢察ください」と断わってききました。ミックのライフスタイルでしょう。彼のクライミングの美学とともに心に響く返事でした。

ミックの隊も、NZ隊も英国エベレスト基金から助成金をもらっています。NZ隊はスポンサーから資金援助を受けているので計画

中止にひどく困惑し、パニックだと言ってきました。仕方なしに彼らは四川省のミニヤ・コンカの衛星峰の登攀に切り替えました。

今回の『特別な理由』による許可問題を振り返ってみて、私には次のように理解されます。

1、欧米登山家やトレックカーの開始は、ネパール・カトマンズの旅行会社を通して段取りや手続きをしていることが起因している面が大きい。カトマンズから依頼されたラサのエージェントは玉石混交である。よくあるケースだが、個人ベースのエージェント稼業の連中は特に注意を要する。

2、中国側も未開放地域へのトレッキングや登山許可に関し規則や具体的な情報を積極的に開示・発信していないことも大きな原因のひとつである。チベット登山協会や旅行会社自身が東チベットの山については詳しくなく、僻地の状況を把握していないし、管理もしていない。最近、無許可の入域や登山が目につき始め、当局の管理不行き届きの責任問題にもなりかねないので、慌てて許可を5か月間ほど停止したふしもある。私のエージェントは、この許可問題は

来年2月ころには解除され元に帰ると言っている。

以上、今秋の東チベットの許可問題をまとめてみました。

前述のように小生の山旅も当初の目的の地域への許可は取れませんでした。が、交渉の結果、別の山塊の探查をし、一応の成果を上げることができました。

1、東チベット・未踏のベナ谷

念青唐古拉山東部・巴松湖の東の未踏の谷(6300~6500mの山)の探查と最奥の僧院探訪。

2、雲南・宣教師の道と雲南の秘峰

雲南最奥—フランス人宣教師の道をメコンの茨中・天主堂からサルウインの白漢洛・丙中洛へ辿り(馬でメコン・サルウイン分水嶺を越える4日のハードなキャラバン)、教会を訪れ、キングドン・ウオードの幻の山(5128m)を初めて写真に収めました。手強そうな岩峰です。

3、四川・雪山と美人谷

最近脚光を浴び始めている歴史的な美人の里、丹巴周辺の「石の塔」の村々を探訪(四姑娘山の西側)。欧米のクライマーが注目する大雪山系・海子山5820mの北面にも入りました。

報告

12月

Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

事業委員会 秋の山陰名峰紀行

北上中の台風22号が直撃の恐れはあったが、進路はかなり北寄りだろうとの期待も強く10月9〜11日、予定どおりチャレンジすることになった。新幹線は大幅な遅れもなく長野、岐阜、愛知、首都圏と総勢12名岡山駅に集結。高気圧は南に下がりコースから外れたとはいえ、相当湿った空気が流れ込みぐっしり三昧の山行だった。

でも単独ではとてもこなせない行動半径で岡山、鳥取、島根の3県にまたがり「山陰の東に大山、西に三瓶山」と国引き神話の舞台、山岳信仰の聖地に出逢う千載一遇と言えた。

山麓老舗の「とやま旅館」で手作り料理、地酒の「真壽鏡」等で

一家総出のおもてなしを受け翌朝「二本一石」の壁のポスターに送られ7時半、秋雨前線に打って出る。夏山登山道をゆったり登ると西日本最大といわれる森閑としたブナ、ミズナラ林のお出迎え。日本海と太平洋型のブナが混在とある。やがて「山の神」の遙拝地点だが、視界はゼロ。5合目あたりから風雪帯でブナ林と別れ急に灌木帯となる。8合目からの一面天然記念物大山キャラボクの大群落はみごとだ。

いよいよ山頂、晴朗ならば後醍醐天皇遠流の隠岐の島も360度内視界に入るだろうか？ でも自然保護委員会での昔取り上げた植生復活運動の状況検分とはなった。緑を取り戻す苦節20年「一本一石運動」の原点に全員感動して立った。混雑する避難小屋で早々



おだやかな山容の三瓶山にて

に昼食、次の目的地三瓶温泉に思い千里で行者谷コースをスピード下山。壮大な大神山神社奥宮、大山寺へと苔むした参道を下り静謐な山郷に帰着した。

さあ、第2ラウンドは二百名山の三瓶山に向け西下。鶴首していた三瓶ホテルに着いて先ず乾燥室を所望し、明日に備えた。

翌朝はハイキング日和の兆しが濃厚で一同ルンルン気分。最高所の男三瓶山を目指す、東へ女三瓶、西に子三瓶、南に孫三瓶と環状に連なる優しい家族山群の趣で、ファミリー登山のメッカかなと思われた。期待したとおりガス雲は飛んでゆく。

女三瓶に9時、男三瓶に10時半、青空の下で一等三角点を確認する。3万年前の火山だそうだが、やさしいおだやかな山容がよかった。一路下山はルート注意を無視するほど中年岳人は元気に飛び跳ねず

定時間の12時、三瓶自然館広場に一同無事下山した。それからは、宍道湖での名物購入、出雲神話街道から中国道をひた走って岡山まで4時間半、神話の国出雲に別れを告げる。
(石岡 慎介)

自然保護委員会

八溝山自然観察会

10月30日17時、清流の久慈川に面した茨城県久慈郡大子町「リバーサイド奥久慈」に集合。温泉に入った後、17時から1時間、地元講師、茨城森林管理署長の西林寺隆さんから「茨城県の国有林」、地元で生れ育った日本植物友の会の藤田泰さんから「スライドによる八溝山の概要」のオリエンテーションを受けた。

夕食後2時から大船武彦会員による「日本山岳の自然と八溝山の特徴」と題したミニトーク、続いて藤田泰講師から配布された資料に基づき「八溝山の植物、原生林と人工林、史跡など」の解説が2時間近くまで続いた。

翌朝、藤田講師が同乗した小型チャーターバスが発する8時半頃には前日午後からの雨も上がった。

た。バスで通過する集落を眺めながら同地の歴史、伝承、気候の違いと作物などについて説明を受け、日輪寺入り口でバスを降りるまでに八溝山の遠景、廃校になった小学校の門柱として今なお健在の太木の化石や手入れの行き届いたスギ・ヒノキの人工林などを車窓から見る事ができた。

バスを降りて黄色い落ち葉が積もる良く整備された山路をゆっくり歩く。日輪寺經由八溝山頂上に登り、参加者全員で一等三角点を囲んで昼食を摂った。頂上は茨城県と栃木県の県境にあり、茨城県の最高峰1022メートルである。本来、眺望の素晴らしいところで富士山、太平洋、会津の山も見えたとのことだがあいにく薄いガスのため展望はなかった。

八溝山には手入れの行き届いた人工林とまったく人手が入っていない原生林がある。北方系と南方系の植物が分布し、冷温帯性植物であるブナ、ミズナラ、カエデ類が繁る植物群落保護林の真っ只中で藤田講師から解説を受け、そこに生息する樹木や草花の特性など知ることができた。

下山路では光圀水戸藩主が命名

した湧き水、龍毛水や金性水で喉を潤し、バスで黄葉のトンネルを潜り抜け、15時前にJR常陸大子駅で解散した。

公募による参加であったが、しっかりしたオリエンテーションと現地での懇切丁寧な解説によつて素晴らしい収穫の多い観察会であった。関係各位に感謝しています。参加会員18名。(南井 英弘)

図書管理委員会

シュラギントワイト

『インドおよび高地アジア
學術調査報告書』別巻
『アトラス(図版集)』
受贈について

本誌707号に「シュラギントワイトのパノラマ図受贈について」として、信州大学山岳科学総合研究所からシュラギントワイトのパノラマ図7枚の復刻の寄贈を受けたことをお知らせした。これ自体も当会にとつてうれしいことであつたが、今回はからずも会員松崎中正さんから、一部の復刻ではなく、完全な形で『アトラス』そのものの寄贈を受けた。

この『アトラス』は、シュラギ

ントワイト3兄弟が1854年から1858年にかけて行つた中央アジア探検の成果として発表された『インドおよび高地アジア學術調査報告書』4巻の別巻であり、ヘルマンとアドルフが描いた絵29、フィジカル・マップ3、地形図4、高地アジアの高峰のパノラマ的プロファイル7、気象図4で、大きさは90×60センチの大冊である。

特に、パノラマを主とした絵は、みごとな技術を駆使して印刷されたもので、実に美麗である。絵の大部分は一番年上のヘルマンが描き、次のアドルフは5枚だけ描い

ている。すべて色刷りのリトグラフ、すなわち石版である。150年ほど以前のものとは思えないみごとさで、色が鮮明のままである。もちろん原図が良くなければ版画もよくならないが、当時の最高の技術によつてでき上がったものである。特に、このような大きい絵を刷ることは、たいへん手間がかかる。絵の大きさは60×45センチである。

シュラギントワイトが、このような大きな図版を発表したのは、これが初めてではない。アルプスにおいても地理的、地質学的調査

二人のアキラ、

美枝子の山

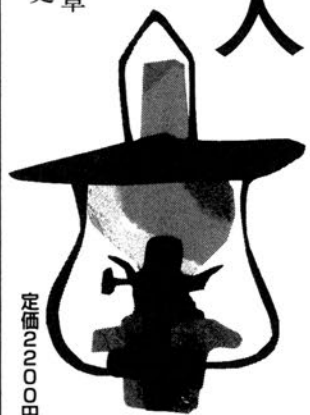
平塚晶人

Hiratsuka Akihito

伝説のアルピニスト

『氷壁』のモデル松濤明、

第二次RCC創設の奥山章をつなぐ女性と山の戦後史



定価2200円

文藝春秋

〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23 Tel. 03-3265-1211

を行い、本文1巻、図版集1巻を1854年に発表している。このアルプスの図版も大きいもので、美しいリトグラフだが、ヒマラヤ・中央アジアの図版は、より大きいし、より美しい。

シュラギントワイト兄弟の探検旅行は、東インド会社の委嘱によって行われたから、彼らはドイツ人ではあったが、この報告書はロンドンから英語版として出版された。ドイツ語版はない。本文は最初9巻の予定であったが、4巻に終わった。旅行記は含まれておらず、すべて学術報告である。天文、気象、地形などであり、動植物は含まれていない。

残念ながら、このテキスト4巻はない。

この『アトラス』は稀観である。現在、日本に所蔵が判明しているのは、国会図書館、国立民俗博物館、信州大学山岳科学総合研究所付属図書館、日本山岳会にある4部である。

かつて、戦前、日本山岳会にも所蔵されていた。木暮理太郎さんからの寄贈であり、1935年に開かれた『山岳図書展覧会』にも出品されたことがある。しかし、

第2次大戦の空襲で事務所とともに消失してしまった。

その後、創立100周年を機会に何とか入手したいと努力し、ヨーロッパのいくつかの古書店に頼んだが、入手できないでいた。このことは、山本健一郎さんが本誌698号で「シュラギントワイトの本」として書かれているから、ご存知の会員も多いと思う。今までは松方三郎さん寄贈のパノラマ図「ヒマラヤのカンチエンジュンガ」1枚だけが、会に所蔵されているだけであった。

そこに松崎さんから寄贈したいとお知らせを受け、図書室としては嬉しさに躍り上がった。こうして、かつて消失した稀観本が、再び会の図書室に所蔵されることになったのである。山岳会創立100周年記念として、たいへんありがたい贈りものである。

しかも、今回の寄贈本は、ほかの3部が所蔵者によって製本され直してあるのに反して、原装のままである。これは保存および利用の面からいえば欠点であるが、文献所蔵からは、大きな利点である。特に稀観本は、原装のまま保存することが大切である。したがって、

ほかの3部よりも文献的価値は高い。

現在図書室としては、山岳会創立100周年記念として、会員諸兄弟に見ていただけるよう計画しているところである。

最後に貴重で高価な本を寄贈していただいた松崎中正さんに心からの感謝を述べたいと思う。

(水野 勉)

同期会

2003年度 同期会発足

昨年度入会の同期生9人が、今年の徳本峠越えとウエストン祭に参加した際、同期会を発足させることになった。9月18日に上高地の西糸屋山荘で最初の総会を開き、規約と世話人を決め、今後の運営について話し合った。

規約の前文には「会員を入会同期の会員に限ることなく、広く参加を認め、登山を通じて常に山の自然に対する敬虔な気持を持ち続け、山を愛し、友情を育て、健全な体と精神を養うことを趣旨として、互いに束縛することなく、自由なさまざまな活動を展開する場

を共有し分かち合うことを運営の基本とする」と述べて、同好の士の参加を歓迎している。

世話人代表には高石道明(信濃支部)、副代表には晝間弘子と今井秀正、会計に宮川美知子と岸裕子、記録・広報担当に斎藤知茂を選出した。斎藤さんのおかげで会のHPも同好会のページにアップすることができた。

そこにも報告されているように、第1回総会の翌日には、蝶ヶ岳登山を行い、11月には雲取山登山を計画した。雲取山では山荘のご主人でJAC大先輩の新井信太郎氏のお話を聞くことにしている。

入会ご希望の方は高石(画090-4170-4910 mikakishi@nifty.com)、または宮川(画042-958-2017 miyacyan-go@bbt.com.ne.jp)、岸(画048-667-1047 hiroko-ki-shi@h3.dion.ne.jp)までご連絡ください。年会費千円の振込用紙をお送りします。

なお、会の名称は、JACの同好会規定に則り、早期に同期会ではない別のふさわしいものに変更する旨、規約の付則に定めている。

(高石 道明)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

山梨支部

第45回木暮祭

今回は45回の節目の年である。支部としては、前日に100周年記念事業である中央分水嶺の踏査を行い、その後、翌日の祭典へ参加するよう計画を立てた。

10月16日(土)、分水嶺踏査。

本日の行程は、登山道に不明な箇所が多いことから5時に瑞牆山荘に集合した。萱ダワ、松ねつこ間は、数度にわたり事前に入山し赤布等を付けたため、特に迷うことなく踏査することができた。

松ねつこ、小川山間は、石楠花の中を泳ぐ箇所が数か所あったが、特に問題もなく3時半、瑞牆山荘

に到着した。

途中、中島会員がマツタケをゲットしたほか、磯野会員も雑キノコをかなり収穫し宿に持ち帰ったが、結局夜の食卓にはのぼることなく終わった。

10月17日(日)、記念登山(分水嶺)と碑前祭。

絶好の登山日和に恵まれ、昨日の宿泊組を含め6名が信州峠に集合し、石つこ、信州峠間を高登谷湖から登るコースで踏査した。

下山後、午後2時から木暮翁碑前にて、主催者側の挨拶のあと、恒例の献花と献酒を行い、記念講演として前深田クラブ会長の小倉厚さんから「木暮理太郎のことなど」と題した講演を聞いた。木暮翁の平地での生活ぶりや東京市史編纂などであり、普段なかなか知られない翁の一面を聞くことができた。

会場には、木暮翁縁の地である群馬県の方や霧の旅の会員であった神谷さんのご子息の神谷良平さんもお見えになった。

碑前祭の終了後、地元観光協会役員手作りのキノコほうとうをいただき散会した。

(小宮山 稔)

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご利用。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ**
<http://www.fellow-travel.co.jp/>

ALPS WAY.
We Love Swiss

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp

〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催:株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会員

国土交通大臣登録旅行業664号 協賛:ウェンゲン観光局・ツェルマツ観光局 後援:スイス政府観光局

日本山岳会の

E-mailアドレス変更のお知らせ

インターネット小委員会

(これまで) jac-info@jac.or.jp

(今後) jac-room@jac.or.jp

日本山岳会のメールアドレスを、セキュリティ向上のため変更いたします。これまで使用してきた jac-info@jac.or.jp は、自動アドレス取得などによって、スパムメールやウィルスメールが連日多数受信されています。これらの不法メール対策のため jac-room@jac.or.jp にアドレスを変更いたしましたので、新アドレスへメールをお送りください(現在は両方使えます)。

なお、会報『山』への原稿は、上記アドレスではなく jac-kaiho@jac.or.jp です。こちらにお送りくださるよう徹底をお願いいたします。

東西南北

富士山の高齢者登拝

小倉 厚



イラスト・宇都木慎一

富士山に高齢登拝なるものがあることを知ったのはずっと以前のことだ。日本山岳会の自然保護委員会で大沢崩れの調査に行ったときのことである。当時の委員長は富士山通で知られる故渡辺正臣氏で、その道すがらの話のなかに「富士山の高齢者登山は75歳からだ。山頂でお祝いの盃がもらえるよ」というのがあった。

私はそれを忘れなかった。私もついに今年で75歳になり、それを実行することにした。まず足らしに富士吉田口の1合目から6合目まで自分の足で歩いてみた。今は誰も通らない静かな道であったが、高齢となった私には若いころと違って巨大な山となったことを実感した。それでも2回目は頂上を目指し、富士宮口を喘ぎ喘ぎ登

った。広い樹海のなかはいざ知らず、自然保護の徹底で登山道は以前とは比較にならぬほどきれいになっていった。問題のトイレも有料化で上手に処理され、これなら世界遺産に登録されても恥ずかしくないのではないかとさえ思った。

そして何とか山頂を踏んだ。さっそく浅間神社に詣で、神職の指示に従って高齢登拝者名簿に署名した。それによると富士山の高齢者は70歳、しかも数え年であると発見した。したがって私は76歳、登頂回数は16回と記入し、確かに記念の盃、その上に「国鎮未廣」をいただいた。下山は富士吉田口。

9月下旬、富士山本宮浅間神社から分厚い封書が届いた。そのなかには丁寧な礼状と28ページにおよぶ「平成16年富士山高齢登拝者名簿」が封入されていた。

それは高齢者登山の壮挙を賛えるとともに、本年開山期（7、8月）中に登拝者総数は約32万人、

そのなかに70歳以上の登拝者は676名とあった。名簿は年齢順に掲載され、本年の最高齢登拝者は98歳、90歳以上が10名、まさに長寿国日本を表徴するような数字であった。数え年76歳、3月生まれの私は201番と記されていた。

100番以内に入るにはどうして80歳以上で登らなければならぬというのだ。「富士喜楽会」という愛好団体では、これに基づいて番付表を作るそうだが、201番では前頭はおろか、十両にもならないのではないかと思う。ちなみに今までの富士登山の最高齢登山者は昭和63年に登った103歳の五十嵐貞一さんだという。

平均年齢64歳に達したというJACC会員、この富士山の高齢登拝者名簿はよい励みになるのではなかろうか。

森谷ピッケルの所在調査について

吉川 信市

ある友人から「自分のことをインターネットで検索したらおもしろいよ」というメールをもらった。

何ごとかと言われるとおりにしたら、「小さな山道具館」というホームページが出て、そのなかに自分の名前と「森谷のピッケル」が掲載されていて驚いた。私が学生のころに秋田の森谷一郎氏にピッケルの制作を依頼した経緯が書かれていた。もう50年も昔の話である。「ある友人」とはエチオピアと一緒にJICAの地下水掘削学校を設置した仲間で、彼の名は指田君というが、掘削の専門家で世界中を歩き回っている。

このホームページの主催者にさっそくメールを送って自己紹介をしたら、もっと詳細の話や写真が欲しいとのことで、これが契機になって所在調査を始めたわけである。このホームページでは世界中の著名なピッケルのみならず、主要な山道具も丹念に記載しており、主催者の行き届いた研究に敬服している。現在この主催者は日本山岳会の会員である。

そこで森谷のピッケルの所在調査をしたいと言ったら、ぜひやるべきだと言われた。秋田支部の佐々木秀民氏に相談を持ちかけたところ大いに賛成してくれて、同じく会員の福田光子さんを紹介し

ていただいた。奇しくもこの方は故福田文二氏の奥さんだった。夫君の文二氏はかつての私の山仲間だったが、惜しくも中国の祁連山に遠征した際に亡くなられた。

昨年の今ごろから調査を始めてやっと99本の実績がわかったが、大部分は福田さんのご努力の賜である。また、佐々木会長の発案で、

地元の秋田魁新報社の新聞記事に、森谷のピッケルのオーナーリスト

作りの記事が掲載されたが、40本から一挙に80本までわかったのはさすがメディアの力は偉大だと感心、記者の佐々木直人さんのご努力には大いに感謝せねばなるまい。

「森谷のピッケル」が世に出た経緯については、今さら書く必要はないが、国産では山内、門田に次ぐ名品であることは言うまでもない。昭和38年に森谷一郎氏は秋田市から文化功労賞として表彰されている。製品の大半は2代目の昭

一氏との共同作品と言われている。全部で2千本を超えているようだが、制作帳簿の大半が失われており、定かでない。ともかく現在何

本存在しているかを、確認することが先決であろうと考えたわけである。50年もたてば世に忘れられ

て不思議ではない。しかし思い出してもらえれば次の50年はまた記憶されるであろう。

森谷のピッケルは秋田のみならず、日本の登山文化史上を飾る貴重な1ページである。現在99本までわかり、あと1本で100本となる。どうぞ皆さんのご協力をお願いします。

シシャパンマ登頂と商業登山

南井 英弘

8年連続10回目のヒマラヤ入りで初めてこの秋、シシャパンマ中央峰商業登山隊（9月1日～10月7日）に参加した。そこには従来の登山形式にない、想像以上の登頂への可能性を秘めた高所登山のジャンルがあった。特に中高年者にとって夢が現実となる良い企画だと実感した。

1、今までの個人遠征では出発前の数か月は多忙を極めた。しかしこの度の登山では旅券、参加費などの振込みおよび、高所で使用するプラブーツ、アイゼンなど装備を出発3週間前までに手配旅行

社に送付するだけ。高所登山の仲間が脱落していった人、勤め人や多忙な人、現地とのネゴが苦手な人などにはまことに好都合である。

2、ホテル、テントを含め宿泊は個室使用が原則。プライバシーが守られ、イビキや夜中の小便時にも気兼ねなし。テントは居住性の高い機能を持つ優れたもので、休養日や午睡時など実に快適で、コンディショニング維持に貢献した。

3、活力源の食事は奥行き十数メートルの食堂テントでテーブル、椅子スタイル。足、腰、膝に快適であった。テーブルの上には常にコーヒ、緑茶、清涼飲料水、あらゆる香辛料、インスタント食品等が並べられ、欲しいときに自由に喫食できた。そのうえ、ソーラー発電による電灯が天井に輝いていた。食事を楽しく、ゆつくり食べる条件が揃っており、毎食笑いに満ちた雰囲気であった。

4、TBC、ABC滞在中は羽毛がたくさん入った幅広の寝袋が全員に貸与され、テント内が氷点下になるABCでも寒さを感じず、睡眠を十分に取ることができた。

5、毎早朝、同行の日本人ガイドが各テントを回りパルス・オキ

シメーターで血中酸素飽和度と脈拍をチェックし、その後でキッチンボーイが紅茶を注いで回り、数分後にはテントの前に洗顔等のお湯が用意されるという健康管理一般の配慮が充実していた。

6、食事は日本食が中心で、毎日バラエティーに富んでいた。高齢者や疲労してきた胃腸に配慮し、朝は粥を多用し野菜、蛋白質も豊富で、食欲をそそる盛り付であった。ネパール人のコックだが長年の経験と訓練で毎食美味しいものを提供してくれた。

7、カトマンズからTBCまで



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここからかけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック

(国土交通大臣登録旅行業1167号)



東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030

大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111

名古屋/〒464-0807 名古屋区千代田東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

車で2日の距離だが、隊員はカトマンズにて準備後、飛行機でチベットのラサ入り、チベット高原を約千キロ車で西進。ホテル等良好な食・住環境のもとエヴェレストやチョー・オユーなど眺めながら、ぜひいたくな高所順応を各宿泊地近くの山で行った。体力および精神衛生上高い効果が得られた。

8、従来は6千メートル前後に宿泊して高所順応を行い、いったん下山しBCでゆっくりと休養をとってからアタックに出かける。今回は6300メートルのC1まで無酸素。C2への登りから適量の酸素を使用することで、次の高所順応のための登降が省略された。その結果、滞在期間の短縮となり高齢者に大きな蓄積疲労をもたらす登降が排除され、楽な登頂へつながった。

9、隊長の標榜する「参加者全員一緒に登頂」が実現した。費用面でも以上のサービス提供と69歳7日で8千メートルに登頂できたことを考慮すれば十分納得のいくものであった。過去40年201人登頂の中で最高齢者のようである。

10、データ 参加者・日本人男性のみ6名、45〜69歳、平均62歳、全員一緒に登頂。参加費用・渡航、

保険、現地費、シェルパへのチップなど含めて1人計約300万円。

75歳、中国未踏峰 念願のスキー登山

宮本 数男

大分の伊東さんより、2、3年前から未踏峰中高年登山隊を結成して登っているの、宮本にもぜひ参加してほしいと再三誘いを受けていた。伊東さんとは1966年の大分国体からのお付き合いで、30年の友情が続いている。

今年は妻の7回忌法要を6月に無事勤めあげ、未踏峰チユンガチン峰(6174メートル)に登り妻に感謝の祈りを捧げることができたことは、隊長の伊東さんに感謝したい。また、2005年の日本山岳会福井支部の100周年記念事業海外登山・未踏峰「札那日字」(6214メートル)の調査を兼ねられ望外の喜びである。70歳から中国未踏峰を登り続けて、今回75歳でまだ誰もやったことのないスキー登山・滑降に成功したことも、長年の夢がかなえられた喜びとしたい。9月2日。早朝福岡空港に行く。

すでに来ていた石原さん、砂田さんに挨拶、関西支部の上中さんとも加わり、総勢8人のうち4人は日本山岳会の仲間である。成都に20時に着きホテルに泊まる。

3〜5日。成都から空路ラサに入る。高度順化のため、大昭寺、セラ寺、ポタラ宮殿などに行き、妻の冥福を祈願する。

6日。日本山岳会の大蔵喜福さんがヒマラヤホテルに同宿していることを知り、レストランに挨拶に行く。大蔵さんは8人のメンバーとシヤパンマに行くそうだ。10時出発、大蔵さんを交えてホテル前で記念撮影。ランクルとトラックでチユンガ谷に入り、昨年も来たBCに着いた。食堂、炊事、トイレ、宿泊のテントを設営、4人用に五十嵐さんと2人が入る。

7日。夜中トイレに起きること度々、満天の星に手が届きそう。今日も快晴。伊東さん、五十嵐さん、私は馬で、今回初めての人はち高度順化のため歩いてC1に向かう。昨年のC1の地点で馬を降り、ガレ場を登って快適なC1予定地を決定、馬でBCに戻る。

8日。7時起床。まだ暗いが快晴だ。ここは広大な中国の西の果

て、チベット自治区、日本時間より1時間遅れの北京時間である。12時頃馬に乗り、荷物はヤクの背中に載せてC1に14時30分に着いた。快適なキャンプサイトだ。

9日。今日も快晴。ポーターに荷物を担いでもらい、10時20分出発。氷河末端にC2のキャンプサイトを設営する。

10日。9時50分、快晴のなか出発、いよいよ頂上に立つ日だ。途中から履いたスキーを滑らせて登る。快適に登ることができ気分良好。コルに12時10分に着いた。ほかの人は青息吐息、大変だ。ここでランチタイム、山々が展望できた。天気が激変、風雪となり高所用のヤッケを着る。ここから急斜面となりピッチが上がらない。1時間ほどで天気も回復し気温も上がる。16時20分頂上に着いた。360度の展望に感動。砂田さんと握手、記念撮影。五十嵐さんと三木さんも程なく到着した。帰りはスキーの醍醐味を満喫した。19時テントに帰る。

11日。8時20分起床、雪が20センチ積もったC2を11時出発、14時15分にC1に帰る。全員揃ってビールで乾杯。無事登頂できて本当に

Climbing & Medicine ・ 40

中高年登山者と
メディカル・チェック

大森 薫雄

近年、中高年登山者が急増し、登山中の突然死が問題となっている。中高年者の特徴として体力の低下と、高血圧症や糖尿病などの疾患を持つ者が多いことがあげられる。中高年登山者の突然死は、心臓の冠血管の動脈硬化による心臓死か、血圧上昇による大動脈、脳動脈の破裂が多い。これらの、突然死を招きやすい病気は、本人に日常生活では自覚がない場合も少なくない。例えば、糖尿病は全身の動脈硬化を起こして脳卒中や心筋梗塞を招きやすいが、“サイレント・キラー”、つまり、沈黙の殺人者と呼ばれるように、自覚症状がないことが稀ではない。そこで、中高年登山者はメディカル・チェック、つまり健康診断を受けることが勧められる。

メディカル・チェックの目的は、登山によって生じる障害や、潜在性の健康を阻害する因子をチェックすることである。特にメディカル・チェックを受けなくてはならない人は、胸が締め付けられるような感じがする人、ちょっと動いただけでも息切れがする人、頭痛

や目眩がしてふらふらする人、顔や足がむくんでいる人などである。

問診で重要なことは、今までどんな病気をしたか(既往症)、家族のなかでどのような病気の人がいるか(家族歴、特に心筋梗塞や糖尿病)、また、今までどんな仕事やスポーツをしてきたか(生活歴)、喫煙や飲酒習慣などである。

検査としては、血液生化学検査、胸部X線検査、心電図検査を行なう。心臓に異常が疑われる場合に行う特殊な検査法として、負荷心電図、ホルター心電図、心エコー(超音波検査)、心筋シンチグラム、心臓カテーテル(心臓血管造影検査)などがある。負荷心電図は運動を行なわせて心電図の変化をみるものであり、ホルター心電図は小型のレコーダーで24時間の心電図を記録して分析するものである。心エコーと心筋シンチグラムは心筋の動きを画像上に描記して、心筋の運動の異常をチェックするものであり、心臓カテーテルは細いカテーテルを心臓の冠血管に送り込んで、冠動脈の狭窄について、場所と程度をみるものである。

メディカル・チェックの結果、問題がないか少なく、登山を行っても良いとなったら、トレーニングをして、筋肉を鍛え、心肺機能を強化して、酸素の摂取量を多くすることである。リスクのある者が、何の身体的準備もなしに登山をするのは無謀である。

*医療委員会では1月20日(木)にシンポジウム“突然死を考える”(東京体育館)を行います。ぜひお申し込みのうえ、ご参加ください

高山病対策 & 高所登山はこれで安心!!

低酸素室

業界初 全営業所に設置完了!!

神々の住む聖なる国 **ネパール** 個人・グループ旅行
お一人様からグループまでご希望に沿うように山旅をアレンジします

現地の手配は全て **アムューストラベル** が行います
正規現地連絡事務所

ネパールを知らなくした現地オペレーターが皆様をサポートします!

山旅専門旅行社 **アムューストラベル株式会社**
〒160-0022 東京都新宿区新宿2丁目6-4 KN新宿ビル11階
TEL: 03(5919)1188 FAX: 03(5919)1189

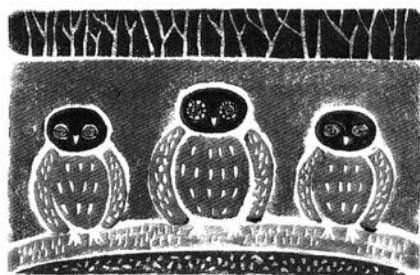
【利用料】 非会員: 3,000円
メンバーズ会員: 1,000円
※お電話・FAX等で事前にご予約ください。

良かった。氷河の末端は川の流れになり、白いミルク状の川だ。ブルーポピーが1輪咲いていてカメラに収めた。ガレ場のあちこちに紫色の花がきれいだ。寝袋に入ると、大地に抱かれているようで安心して眠れた。

12日。テントを撤収、BCに帰る。パサンはおいしい料理を作ってもてなしてくれた。今夜が山中での最後の夜となる。

18日。無事福井に帰る。6年連続で未踏峰7座に登ることができ、高齢者でも目標があれば達成できることを知り、うれしく思う。

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

『The Alpine Journal 2003』

The Alpine Club・刊

The American Alpine Club・刊

『The American Alpine Journal 2003』

英国と米国の代表的な山岳会の機関誌であるが、内容的には世界の登山情報を網羅した山岳情報誌といえよう。

エヴェレスト初登頂50年目のAJ (The Alpine Journal) にはエヴェレストにちなんだ記事が多い。遠征初期のエピソード、等高線5分間隔で5千分の1の地図の紹介、戦前のエヴェレスト隊最後の生存者・ピーター・ロイド元AC (The Alpine Club) 会長や、24

年隊に参加し、35年ドイツ・ナガバルバット隊遭難時に唯一生還したシエルパのアンツェリンの追悼などがある。また、100年前のAJの抜粋や1870年代の中央アジアの記事は往時を偲ばせてくれる。

AJ (The American Alpine Journal) の巻頭言で編集長は、チベットの未開地域に入るため資料を探していた時に、JACの中村保氏の『ヒマラヤの東』に出会ったと述べている。AJとして前例のない30ページをこの「ヒマラヤの東」に費やし、中村氏の25回目までの探検行と写真を掲載している。

AJもまた、中村氏の「チベットのアルプス 第2部」に多くのページを割いている。いずれも魅力的な写真と内容が岳人たちの目を惹くことだろう。

そのほかの共通点として、世界各地を地域別に区分した当年の登山情報が充実しており貴重だ。

AJの「高山病と対処」では高所順応へのヒント、肺水腫、脳浮腫への対応とダイヤモンドックス、デ

キサメサゾンの効果的服用などを記している。

AJでは02年9月に世界各地の山岳団体代表とトップクライマーがチロルで実施した国際登山者会議の意義を解説し、チロル宣言の全文を掲載している。

両書とも小さな字でびっしりと書かれているが、AJは記事のなかに関連写真が組み込まれており読みやすい。また氷壁、岩壁の登攀、スキー、スノーボードでの下降の写真なども多く、見るだけでも楽しめる。

100年前にACをモデルに発足した我が日本山岳会であるが、機関誌の充実度の違いを痛感した。

AJ388頁 AJ495頁
(南井 英弘)

Ezan Wilson・編

『The Journal of the MOUNTAIN CLUB of SOUTH AFRICA』 Number 105 for the year 2002

1891年に創立された南アフリカ山岳会の機関誌である。

巻頭、アフリカ、海外、一般情報、登攀ルート、追悼、本部、各支部の年間報告に大別され、見開

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

きのページに初心を忘れないよう当山岳会の目的を掲載している。

2002年の国際山岳年を記念して多々催しをしている。なかでも9月14日から24日までを「People on Peaks」と定めて広大な南アの山々にたくさんの方が登ったことが報告され、海外在住会員の登山として、日本で富士山に登頂したことも記されている。

南ア国9州のなかでいまだに最高峰の高さが確定していない山もあり、GPSを利用して各州の最高峰の標高を精査したり、しっかりと地図がないので本峰に登り

損ねたとか、あるいは吹雪にあった深雪に悩まされたといった話題もある。

日本の面積の3・5倍を有する国土には断崖状の岩壁や鋭峰がたくさんあり、岩登りの場を提供している。登攀ルート欄を含めてロック・クライミング愛好者には興味をかき立てる写真も多い。

遠征欄では会員が世界に羽ばたいていることがうかがえる。なかでもカラコルムのスノーレーク、アンナプルナ内院、若者によるアルプスの旅は目を惹く。

毒蛇の話、高山植物、昆虫の生態の発見など南アならではの話もおもしろい。機関誌は基本的に英文だが、2点は残念ながら紹介者の手に負えない言語であった。

上記した機関誌本体とともに78ページの立派な索引集(1979年から2000年分まで)が付いており、山名、山城、人名、地図名などから既刊誌を探すのに便利だ。1891年の創刊号以来すでに2巻の索引集が刊行されており、今回は3巻目である。

(南井 英弘)

The Mountain Club of South Africa (Cape Town Section)

2003年刊 199ページ

斎藤一男・著

『山の文化(やまの文化)』

あえて著者は「登山の文化」ではなく「山の文化」を語る。もちろん登山も含むが、もっと広範な山岳自体と人との係わりをテーマとしている。

山はもともと天に近く、山こそ神のいます霊場とする意識は、日本ばかりでなく古代から人類の意識にあった。

日本では山岳信仰を基盤とした修験道や江戸期に発展した富士講、古くは奈良期以来の風土記のなかで山は人から眺められているし、火山国日本の特長として、名山高岳から湧出する豊かな温泉では多くの庶民が楽しんでいる。

日本山岳会発足を中心として起る近代アルピニズムの発展と変遷は著者のもつとも得意とする分野だが、ここでも新しい資料で補強されてしつかりとした登山史となっている。スポーツ・クライミングに1章を加えたのは、著者ならではの配慮だ。

「日本百名山」をはじめ、「XX

百山」と多くの名山が数量でしかとらえられない風潮に心を痛めている昨今。かみしめて読ませていただいた。

(國見 利夫)

2004年3月 アテネ書房発行 441頁 4200円

南会津山の会・編

『続 いろりばた』

『いろりばた』は南会津山の会の会誌名である。この会誌は必ずしも定期的に刊行されていたとは思われないが、かつては東京でも山の書籍を扱っている店頭でよく見

かけることがあり、その内容の特色に魅せられたものである。

昭和47(1972)年に、これら既刊の会誌のなかから精選したすぐれた文や写真がB5判変形の同名のみごとな単行本になって刊行された。当時、一地方の山岳会の会誌をまとめた本としては内容、造本ともに典雅なできばえで、その刊行が高く評価され続刊が望まれていた。

今回三十有余年ぶりに待望のその続編が刊行された。この『続いろりばた』は一部の修整を除いて、正・続編という一体性から、

おれ にんげんたち

——デルスー・ウザラーはどこに——

黒澤明が感動したように、デルスーに魅かれて



探検家アルセニエフの生涯とその足跡をウスリーのタイガにたずね、デルスー像の検証から、二人の友情、自然と人間のかかわりを豊富な資料を駆使した巧みな筆致で探究する。

岡本 武司 著
四六判 220頁 1,890円(税込)

カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入
385ページ B全判地図13葉
宮森常雄 (秩父宮記念山岳賞受賞)・
雁部貞夫 共著 ・カテゴリーをご請求下さい

◎好評発売中!!

34,650円(税込)

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

基本的には前著を踏襲する形式になっている。主として前著以後に発行された会誌から精選した四十余篇の文と写真が収録されている。

そこにははげしい登攀の記録はない。南会津の歴史と生活の息づくなかでの静かな山や沢歩き、峠越え、山村民俗との出会いなどが淡々と記されている。すでに失われていった風景や民俗もあるうが、綴られている地味で飾らない文章からは南会津の美しい風土や生活が映像詩のように伝わってくる。

南会津山の会には、故望月達夫氏も在籍され、静かな山や峠を愛し、会誌にもよく寄稿されていた。山田哲郎氏によると、望月氏編集による前著が今回の『続 いろいろばた』誕生の動機となったとその経過を記している。巻末に添えられた会員の望月氏を偲ぶ1章は、その面影をよく伝えるとともに、よき追悼となっている。

本書は企画者、編集者、出版社が連携して生み出したまことにさわやかな書で、読者に炉端山話の限らない楽しみを与えてくれるのである。

(松家 晋)

2004年3月 茗溪堂発行
330ページ 3000円

『垂直の記憶 岩と雪の7章』

山野井泰史・著

日本人としてただひとり、世界に通用するアルパイン・クライマー・山野井泰史の自伝。1992年、26歳でのブロード・ピーク登山から2002年にギャチュンカン北壁から辛くも生還するまでのヒマラヤ登攀7編をまとめたもの。著者のクライミングは、周到なルート研究と己に厳しいトレーニングを果たした努力の結果である。その「自己の限界」が「現代のクライミングの限界」に重なることになった。

命をすり減らしながら生きのびた記録として貴重であるばかりでなく、そのような登攀での心の動きを正直に綴っていて感動的で、著者の強い精神力を感じさせる。明解な文章で描かれた登攀シーンは臨場感あふれ、エキサイティングだ。

緊張するヒマラヤ・クライミングの章の間に「コラム」が挿入されていて、奥多摩での質素な生活、少年時代の思い出が語られるなかに「ひとりのときは今までケガを

創立100周年記念事業にご協力を

したことがない。国内を含めてケガをするのは妙子と一緒にのときが多いのだ。(中略)僕はどこかで気にかけて、守つてやろうという気持ちが大きくなりすぎているように思える。確かにいつもの集中力とどこか違う。(中略)本当に困難なクライミングを追及するときにはひとりで登った方が安全で、生きて帰れる可能性が大きくなると思う」と、ソロ・クライマーの本音を語っている。生死を分けるクライミングの最中に、妙子夫人は並はずれた力や予知能力を発揮するクライマーであるという。

すぐれた登攀者の新しい表現者の登場だ。続編を期待したい。

(松沢 節夫)

2004年4月 山と溪谷社刊
244ページ 1500円

『名山の日本史』

高橋千劔破・著

岩木山から雲仙岳まで四十名山の歴史と文化を探索した力作。近代登山の開幕以前から日本人は山

登りが大好きだった。その背景には自然崇拜があるが、信仰登山といえども冒険、体育、遊戯の動機が横溢している。そして名山にはほぼ例外なく名刹があり、山頂から山麓まで堂塔伽藍と無数の坊が建ち並び、祭天の古俗たる神道を巧みに融合した絢爛たる仏教文化が花開いていた。それは日本の登山の原風景といつてよい。

これを破壊し尽くしたのが日本文化史上最大最悪の愚行、明治初年の廃仏毀釈だった。それによって膨大な文化遺産が失われたばかりか、山の人文風景も白紙化された。今見る名山の風景はたかだか100年ほど前からのものなのだ。著者は一山一山、考古学資料から近世文献まで徹底して史料にあたり、伝説(同系の分枝・改変、他山への転移等)を調べ尽くし、歴史ジャーナリストの長いキャリアと少年期から続く山への憧憬がみごとに結合、前代未聞の山の本を書き上げた。

(平井 吉夫)

2004年3月 河出書房新社
発行 478ページ 2600円

会務報告

10月理事会

日時 10月13日18時30分～20時
場所 日本山岳会会議室

「出席者」 平山会長、芳賀、平林、橋本各副会長、藤本、今村、小川、朴元、大蔵、賛田、田村、鈴木、野口、石田、篠崎、鳥居各理事、内田、一力各監事、宮崎、鰐坂、西村、小倉(董)、重廣各常任評議員
「委任」 黒川理事

【審議事項】

1 創立100周年記念事業活動予算 橋本

●別紙の通り、総額8500万円の予算とする。

●収入については全額寄付金でまかなうことを原則とするが、目標に達しない場合は事業規模を縮小するか、長期積立金の取り崩しを考える。

2 茨木猪之吉作絵画の寄託 (承認)

鈴木

●資料・映像委員会で検討を進めてきた、故茨木猪之吉氏の絵画作品45点を長野県池田町立美術館に寄託する件を承認して欲しい。

●寄託先について、広く支部や会員の意見を求めたか。

●全国山岳博物館会議で承認を得ている。

3 長期目標検討委員会提案検討 (承認)

平山

月末に会長、副会長会議を実施してたたき台をつくり、次の理事会に提案するので、それを検討していただきたい。

【監査役からの質問事項】

(承認)

1 平成16年上期の監査はいつやるのか。

内田

後刻日程については打合せて決定する。

2 100周年記念事業の収入、支出の会計処理について具体的に説明していただきたい。

橋本

なお、本件については議事録に記載されたい。

●現在は簡易簿記で実施している。

内田

●この特別会計を開いて以来、相当の時間がたっているのに、未だに正規の会計処理がなされていないというのは非常に問題である。

賛田

早急に複式簿記による会計帳簿を作成すべきである。特に支出については、大至急やらないと内容がわからなくなってしまう。

内田

●専任の担当者を設けて早急に整備する。

【報告事項】

以下の件が担当者より報告され承認された。

1 予算管理月報(2004年上期)報告 橋本

別紙の通り報告された。

2 平成16年度各委員会予算執行状況 橋本

別紙の通りであり、全体で約4割の執行状況である。

3 会報「山」10月号の内容について 今村

100周年ニュースは「医療ハインドブック」について。

4 学生部登山隊登頂 鳥居

チーブ・ヒマール峰(6650m)に9月18日、サリブン(6328m)に9月19日に登頂した。

5 シンポジウム「山での突然死を考える」 野口

2005年1月20日、東京体育館で実施する。

6 絵画寄贈 鈴木

牧潤一氏より3点のスケッチ画が寄贈された。

7 特殊切手「登山、山岳」発行 藤本

平成17年5月に、郵政公社の特

殊切手として「登山、山岳」をテーマとする切手が発行される。

8 アジア山岳連盟総会 篠崎

2004年10月30日に韓国ソウル市で開催される。

9 同好会発足 藤本

「2003年度同期会」が発足。3年後、同好会に移行。

10 東海支部ブロック式典 藤本

2005年5月7月(出)に決定。

11 撮影、掲載許可願 藤本

北日本放送・日本テレビ・山と溪谷・中日新聞・桜門山岳会・パ

ンフマウンテンフィルムフェスティバル。以上承認された。

世界の山旅



「一人では行けない、でも、行きたい。」
それにお応えするのが実体験に基づいた
アルパインツアーの旅づくりです。



国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 日本CFP協会会員
アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

12 支部懇談会

藤本

10月2日、熊本交通センターホテルで170余名の参加で盛大に行われた。

なお、福井支部主催の支部懇談会は平成18年度に実施される。

14 会員募金状況

芳賀

総額1500万円で約半数の会員が寄付して下さっている。目標は4000万円なので、ぜひ寄付にご協力いただきたい。

15 自然保護全国集会

篠崎

上高地で、9月10・12日開催され120名余りの参加があった。

16 晩餐会後の懇親山行

朴元

中央分水嶺踏査委員と共催で、軽井沢碓氷峠の分水嶺を歩く。全国の支部長にも参加を呼びかける。

17 本年度『山岳』の内容紹介

芳賀

18 来年1月12日(水)に臨時理事会を開催する。

藤本

■会員異動(10月)

物故

奈良原町子 (6493) 04・10・8

岩淵 泰郎 (4091) 04・10・18

退会

高林 廣夫 (13256) 岐阜

神谷 文子 (10186) 熊本

図書受入報告 (2004年10月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入別
鈴木常夫(編)	東海山岳 2004 (No.9)	554pp/21cm	JAC 東海支部	2004	発行者寄贈
奥野幸道	丹沢今昔:山と沢に魅せられて	169pp/21cm	有隣堂	2004	著者寄贈
水野勉	中央アジア文獻逍遙 (第1号)	393pp/26cm	水野勉(私家版)	2004	著者寄贈
京極絃一	素晴らしき幸運な登攀	277pp/19cm	北海道新聞社出版局	2004	発行者寄贈
成蹊踏高會(編)	覆刻 記録・會報	783pp/23cm	成蹊学園史料館	2004	発行者寄贈
西口徹(編)	植村直己:夢・冒険・ロマン(KAWADE夢ムック 文藝別冊)	215pp/21cm	河出書房新社	2004	著者寄贈
加賀勝(編)	回想のナンバ:松島静吾氏の遠征日誌より	47pp/26cm	松島佑子(私家版)	2004	発行者寄贈
米倉久邦	そうだ、山へ登ろう!:森林インストラクターになっちゃった	191pp/19cm	三五館	2004	著者寄贈
堤信夫	全図解クライミングテクニック	167pp/21cm	山と溪谷社	2004	著者寄贈
中京山岳会インドヒマラヤ隊	インド・中国国境 知られざるパンゴン山脈の山 2004年8月帰国報告書	/30cm	中京山岳会	2004	発行者寄贈
日本ヒンズークシュ・カラコルム会議(編)	第20回日本ヒンズークシュ・カラコルム会議資料(2004年10月)	82pp/30cm	日本ヒンズークシュ・カラコルム会議	2004	発行者寄贈
植木毅	スキー:ダイナミックに滑ろう(講談社スポーツシリーズ)	198pp/21cm	講談社	1969	竹中工務店山の会寄贈
川口邦雄	アルプスの読本:雲ノ平・黒部・薬師	222pp/18cm	朋文堂	1967	竹中工務店山の会寄贈
八木治(文)小尾昭(写真)	山岳写真教室	104pp/19cm	山と溪谷社	1960	竹中工務店山の会寄贈

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆スキー懇親会のお知らせ

事業委員会

恒例のスキー懇親会です。

期日 平成17年1月8～10日

費用 2万円(宿泊料・保険料)

場所 乗鞍高原・ヒュッテほし

集合 現地集合・解散

定員 先着30名

申込 12月25日までに住所・氏

名・年齢・会員番号・電話

番号・FAXを明記し、ハ

ガキまたはFAXで山崎浩

子宛(〒236-0033

横浜市金沢区東朝比奈1-

65-3 電045-782-

8712)

*申込者に詳細をお送りします

◆講演会「登山とサプリメント」

科学委員会

健康で安全な登山のためのサプ

リメントの活用方法、効果的な摂取

法、使用上の留意点、ドーピング

との違いなど、サプリメントに関

する正しい知識や判断力を得たい

と思います。

日時 平成17年2月17日(木)18時30

分より

場所 日本山岳会集会所

講師 鈴木志保子氏(神奈川県立

保健福祉大学助教授)

※事前の申込みは必要ありません。

◆高橋てる子 山・花の絵展

山と花の情景の油彩と植物画

会期 平成17年1月3(月)～11日(火)

10～20時(最終日16時)

会場 ギャラリーダダ(横浜そご

う9階 電045-461-

1533)

ルーム目誌 10月

1日 JAC01会

4日 総務委員会

5日 図書委員会 アルパインス

6日 アルパインスキークラブ

山岳地理クラブ

7日 アルパインスケッチクラブ

図書委員会 フォトビデオ

8日 クラブ 山の自然学研究会

高尾の森実行委員会

休山会

12日 常務理事会 青年部

アルパインスケッチクラブ

13日 理事会

山想倶楽部つくも会

15日 総務委員会 学生部

16日 新入会員オリエンテーション

18日 資料・映像委員会 図書委

員会 森づくりの会

19日 長期計画検討会

山研運営委員会 事業委員

会 会報委員会 インター

20日 ネット小委員会 00同好会

三水会

21日 科学委員会 ゆきわり会

22日 学生部

25日 図書委員会

26日 自然保護委員会

秩父宮賞選考委員会

27日 式典委員会 分水嶺委員会

アルパインスキークラブ

28日 青年部 山遊会

29日 JAC01会

30日 評議委員会

資料委員会 事業委員会

10月来室者591名

◆編集後記◆

●会報「山」の企画コーナーである「海外の山」をお願いしている

江本嘉伸氏から、「来年1月号で担当20年になる。後進に道を譲りたい」との申し入れがありました。編集長としては、「会報の中で海外の最新のニュースを伝える目玉コーナーであり、余人を持って代えがたい」と遺留に努めております。次期編集担当の方とも相談していきたくと思っています。ちなみに「海外の山」は1985年2月号からスタート。今月号で227回の連載となりました

●恒例の晩餐会では会員全員参加の中央分水嶺踏破事業が各支部を中心に、会全体の大きなエネルギーとして感じられました。また、60歳を超えた会員のヒマラヤ高峰への登攀意欲もあちこちのテーブルで感ずることができ、大変有意義な晩餐会でした。(今村 千秋)

日本山岳会会報 山 715号

2004年(平成16年)12月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 今村千秋

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社